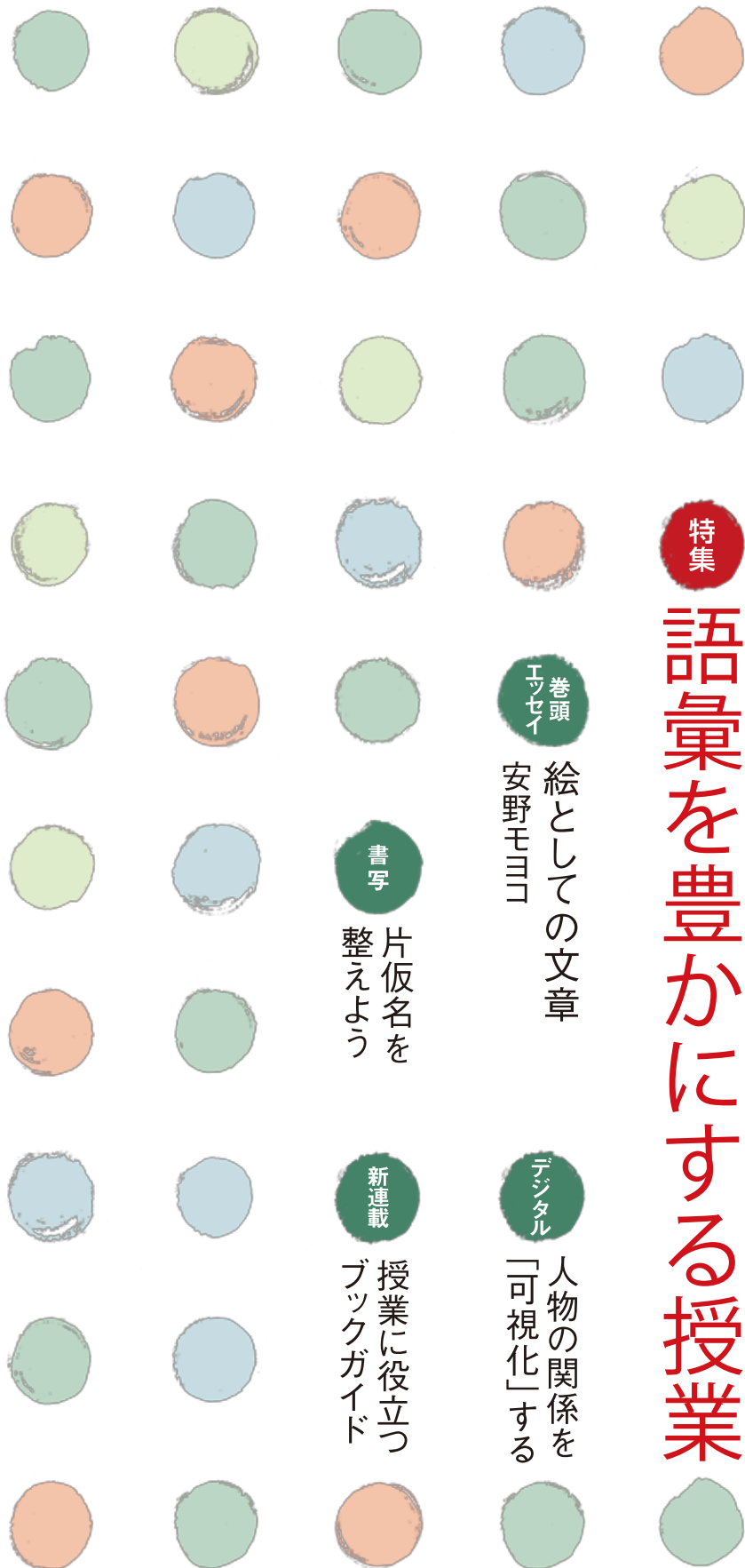


国語教育相談室

中学校
no.
85

光村図書



特集

語彙を豊かにする授業

巻頭
エッセイ

絵としての文章
安野モヨコ

書写

片仮名を
整えよう

新連載

授業に役立つ
ブックガイド

デジタル

人物の関係を
「可視化」する

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のうとって配布しております。

児童文学の冒険

飛ぶ教室

年4回(1・4・7・10月25日)発行

最新号!



■第52号(2018冬)

特集「『飛ぶ教室』的 世界一周旅行!」

定価: 本体1,000円+税 / ISBN978-4-8138-0007-1

世界の子どもの日常、そして子どもの本の「今」を、地球をぐるっと一周しながらお届けします。

〈表紙〉早川世詩男

台湾: 呉明益 タイ: 陣崎草子 / ピヤワン ニン サップサムルアム
韓国: 渡辺奈緒子 中国: 王林 ネパール・インド: 矢萩多聞
ケニア: さくまゆみこ モロッコ: 松田奈那子 スペイン: 古久保真依
スロバキア: 洞野志保 ドイツ: マライ・メントライン / 那須田淳
オランダ: 野坂悦子 スウェーデン: 大森巳加 イギリス: 高島純
アイルランド: 長崎訓子 アメリカ: プラム末廣 理沙
オーストラリア: 川端裕人

〈対談〉金原瑞人×三辺律子



■第51号(2017秋)

特集「カレーライス物語」

定価: 本体1,000円+税 / ISBN978-4-8138-0006-4

みんなが大好き、「カレーライス」。この一皿から果たしてどんな新しいお話が生まれるか!? 「飛ぶ教室」風カレーライスを、ペコペコのおなかを用意して、ぜひどうぞ。

〈表紙〉加藤休ミ

〈詩〉谷川俊太郎 / 文月悠光

〈短歌〉天野慶 / 松田梨子・わこ

〈童話〉高島じゅん子 / 昼田弥子

〈超短編〉斉藤洋

〈短編〉大前栗生 / 河合二湖 / 小路幸也 / 長嶋有

光村図書出版株式会社

●バックナンバーの詳細な内容は、光村図書ウェブサイトをご覧ください。 www.mitsumura-tosho.co.jp
●ご注文は、お近くの書店、またはオンライン書店でどうぞ。



光村図書

中学校 国語教育相談室 通巻No.181 2018(平成30)年1月31日発行

発行人=小泉 茂 発行所=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp 印刷所=株式会社 加藤文明社 デザイン=mg-okada

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」のうと、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。 www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書出版までご連絡ください。

きつと

早稲田大学教授
森山卓郎

「走れメロス」に、「その身代わりを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰って来い。遅れたら、その身代わりを、きつと殺すぞ。(略)」という、王の会話文の一節がある。実は、この文の解釈には、微妙なゆれがある。ここでの「きつと」の解釈に違いがあるのだ。前年にこの教材を学習した中学校三年生二七人に、ここでの「きつと」に近い用法のものを含む文を、次の三つの例文から選んでもらったことがある。あなたならどれを選びますか？

(1)ののしられた彼は、きつとなってにらんだ。

(2)きつと明日は雨だ。

(3)きつとやり遂げてみせたい。

まあ(1)は明らかに違う。(2)は微妙。ふつうに解釈すると「たぶん」と同じ推量の意味、すなわち「雨でない」可能性が残されるという意味だ。五二％がこれを選んだ。その理由について書いてもらつと、「まだわからないから」

「これから何が起きるかを予想しているから」のような記述が多かった。しかしどうだろう。「きつと殺すぞ」は「たぶん」のような予想や推量の意味だろうか。これは王がセリヌンティウスを身代わりの人質にする場面。メロスが時間通りに帰ってこない場合、「必ず」セリヌンティウスを殺すのではないか。「たぶん殺すぞ。でも、助けるかも」という意味ではないはずだ。

そうすると、ここでの意味は、「間違はなく、必ず、殺すぞ」という、(3)「きつとやり遂げてみせたい」の方ではないだろうか。事態実現への強い思いを表す用法だ。しかし、これを選んだのは四七％だった。

小学校の国語教材にも、同じような「きつと」がある。「(略)自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、やさしささえあれば、やらなきゃならぬこととは、きつとやるもんだ。それを見て、

他人がびっくらするわけよ。」(三年下巻「モチモチの木」という会話だ。「おくびょう豆太」が、具合が悪くなったじさまのために、夜中に、ふもとまで医者様を呼びに行くことができたことをふまえている。この「きつとも」たぶん」ではない。「やらないこともあり得る」という推量だと、この文脈には合わない。「やらなきゃならぬこととは、必ずしかりやる」のではねえか。

「きつと」の意味用法には広がりがある。日常生活では、「たぶん」の意味の方をよく使うように思う。しかし、「間違はなく、必ず」の意味もある。どちらの意味かは読みにも関わる。

だから、「きつと」のような言葉に立ち止まることも時には必要だ。「言葉にこだわる詳細な読み取りなんてだめだ」なんて言われたら、ぼくはきつとなつて、「きつとそれは違います。言葉を大切に読み取りもきつと重要です」と言つつもりだ、きつと。

CONTENTS

探検！言葉の森 34 きつと 森山卓郎

巻頭エッセイ 言葉と向き合う 02 絵としての文章 安野モヨコ

特集 04 語彙を豊かにする授業

インタビュー 言葉が生まれる先端、それが国語の授業だ。 サンキュータツオ

実践1 生きた場面の中で言葉に出会う 甲斐利恵子

実践2 「なんかちょっと……」「そうきたか！」の循環 齋藤隆彦

実践3 「ヤバイ、ビミョー」からの卒業
～もっと「伝わる」表現を目指して～ 村上薫子

デジタル教科書 奮闘記 5 18 人物の関係を「可視化」する 渡辺光輝

先生のための 板書講座 4 22 片仮名を整えよう 坂井孝次

授業に役立つ ブックガイド 1 24 絵本ともっと親しくなるための読み聞かせ 高橋 伸

絵としての文章

漫画家

安野モヨコ

私は常々文章も絵であると思って本を読んでいる。
それはどういうことかと言うと見開き一ページの文章や記事を読むときに文章の意味、内容などは別にページを画像として見るということ。一枚の絵、もしくは大判の壁紙に印刷された模様だと思ってページを見るのである。漫画家という職業的なクセなのかもしれないけれどこれが結構面白い。

今、試しにやってみていただきたい。ページから少し目を離して全体を見ると漢字の割合によって全体的に黒く見えるページと中くらいのバランスのグレーのページ。そして余白やひらがなが多い白っぽいページなどがある。他の文章もそうやって見ていくと、書く人が変わるとページの印象が変わることに気がつくだろう。日本語の意味をわからない外国人や宇宙の人から見たら文字は描線を構成するパーツにすぎない。その感覚で見れば文字は意味をなさない模様と捉えることもできる。

ひらがなが多い文章はパツと見たときに原っぱに放たれた動物が走って散っていくようだし、漢字とひらがながちやうど同じくらいのバランスの文章の場合はうごめく人々を上から見ているような感覚に陥る。漢字が多めの文章はぎっしりと隙間なくビルの立ち並ぶ大都会のような印象を受ける。

絵、として見ていく中でももうひとつ踏み込み今度は多少の日本語の知識があることをベースに見てみよう。文字は描線を構成するパーツでもあり、漢字や熟語は意味による色合いを構成する絵の具でもある。

改行や漢字の使い方にクセのある人はパツと見てその人の書いたものとわかる時がある。

漢字の量が同じくらいのもうでもページを見れば谷崎潤一郎なのか岡本綺堂なのかはなんとなくわかる。

使用する漢字の種類が違うから、漢字によって生じる「黒く見える部分」の密度に差がある。

私の印象では谷崎の方が若干黒い。入り組んだ画数の多い漢字を好んで使うのもあるがその熟語の意味自体が全体に影を落としている部分も多い。

漢字だけではない。ひらがなもカタカナも使用する語尾やどの漢字をひらがなに開くか、なども画面構成には大きく影響してくる。

多用する接続詞や形容詞がどのような言葉かによって画面上に多く現れるひらがなの種類も変わってくる。

語尾を丁寧にすれば必然的に「ま」「す」「で」などが割合として多くなる。

「す」や「で」は文字の画数が少ないの

からである。

印象ということという文字そのもののデザイン性とは別に一瞬でわかる言葉の意味や文字の印象というのも、ページそのもののヴィジュアルに影響する。

例えば「絢爛」や「瀟洒」という二文字から受ける意味的印象と映像的印象は一致していてページの中にあるだけで「繊細で美しい何かが存在する空間」を感じることができる。ただしそれは全体の文脈や他に使用されている文字とのバランスが非常に重要で、もしも文脈の中に「居

酒屋」や「するめ」などが同時に存在した場合「熱爛」「鰭酒」と書いてあるような錯覚に陥る。

文章を映像的に見るということについて思いつくままにまとまりもなく書いてきたが日本語における文字の印象や画面の印象を絵として「見る」ことの面白さが伝わればと思う。

最後になるけれど文章において最も重要で大切なことは当然のことながら内容である。ものすごく当たり前のことを偉そうに言っただけだが、映像的に見て美しくても文章がつまらなければどうしようもない。文章が面白くても内容がなければそれは全くどうにもならない。

一番よろしいのは文章が面白く、内容が濃厚でありながら画面的にも美しいこととでありそういう文章を書ける人がこれからどんどん増えていくと良いなと願っている。

そう願う私自身ももう少しどうにかしなければならぬと日々精進するばかりである。



安野モヨコ
あんの

1971年、東京都生まれ。『ハッピー・マニア』で大ブレイク後、『ジェリー・ビーンズ』『花とみつばち』『さくらん』『働きマン』など、数多くのヒット作を生み続けている。2005年、『シュガシュガルー』で第29回講談社漫画賞を受賞。絵師として個展を開き、紙版画集『篇と鸚鵡』を刊行。表現活動の幅をさらに広げている。現在、『AERA』で『オチビサン』、『FEEL YOUNG』で『鼻下長紳士回顧録』を連載中。主なエッセイに、『くいん』（文藝春秋）、『美人画報』（講談社）など。

「子供」になると文字の印象が今度は重くなり、意味的には公共の要素が強まってどちらかというと大人側から見た社会についての立ち位置、といった趣になる。さりとて「コドモ」と、カタカナにするとはそれはもう「コモドドラゴン」のことしか想い浮かばない。これは「コドモ」というカタカナ表記を目にする頻度よりも「コモドドラゴン」の印象の方が強い

語彙を

新学習指導要領では、語彙指導の充実が求められています。語感を磨き、語彙を豊かにする授業づくりについて考えます。

豊かにする

授業



サンキュータツオ

1976年、東京都生まれ。漫才師・学者芸人。お笑いコンビ「米粒写経」として活躍するいっぽう、一橋大学・成城大学・早稲田大学にて非常勤講師を務め、外国人留学生への日本語教育も担当する。早稲田大学第一文学部卒業後、早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻博士後期課程修了。文学修士。200冊を超える辞書を集集する辞書コレクター。著書に、『学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方』『ヘンな論文』（ともに角川学芸出版）など。

撮影・鈴木俊介

インタビュー サンキュータツオ

言葉が生まれる先端、それが国語の授業だ。

言葉の意味や使い方を知りたいときに、身近で頼りになる国語辞典。『学校では教えてくれない! 国語辞典の遊び方』の著者・サンキュータツオさんに、国語辞典の魅力、国語辞典を通して知る言葉のおもしろさについてうかがいました。

国語辞典は

もっとも身近な学術書



— 200冊を超える辞書をコレクションされているとのことですが、どうして国語辞典に興味をもつようになったのですか。

実は僕、中高生の頃は、国語に苦手意識をもっていたんです。だから当時は、国語辞典の魅力なんて考えたこともなかったですね。

辞書にはまったのは、大人になってから。

たまたま、大学院の指導教官が、『集英社

国語辞典』編者の中村明先生だったんです。

それで、ゼミでは、さまざまな国語辞典を比較するというのを一年間かけてやった。

国語辞典なんて、どれもそう変わらないし、それほど掘り下げるものもないだろう。正直、初めはそんなふうに思っていました。でも、それが見事に覆された。

「この言葉が載っているのはどれか」「語釈はどう違うか」「用例が充実しているものはどれか」など、一年も比較し続ける

ことができるぐらい、国語辞典には見どころがたくさんあることを学びました。そして、出版社ごとに全く違う方針のもと編まれていることも。国語辞典は、編著者の言語観が表れた、もっとも身近な学術書なんだというのに気づいたんです。それからほとんどおもしろくなって、出版社や版が違うものを集めて、読み比べをして楽しむようになりました。

— 普段、どんな楽しみ方をされているのですか。

僕が勝手に「ビッグ4」とよんでいるのが、『岩波国語辞典』『三省堂国語辞典』『新明解国語辞典』『明鏡国語辞典』の四冊です。戦後、多くの出版社からさまざまな辞書が



——さまざまな意味や使い方に意識を向けることは、言葉を使いこなすことにもつな

言葉を使いこなすために



——さまざまな意味や使い方に意識を向けることは、言葉を使いこなすことにもつな
きます。こんなやり方もあるんだと感心しました。「新しく知った言葉辞典」とか、ジャンルを限定して取り組んでもいいんじゃないかと思っています。

——読み比べの他にも、教室で取り組みそうなことはありますか。
クラスでオリジナルの国語辞典を作るのもいいですね。以前、僕の本（『学校では教えてくれない！国語辞典の遊び方』）を読んでもくれた学校の先生が、クラスで作った国語辞典を送ってくれたことがあるんです。

——読み比べの他にも、教室で取り組みそうなことはありますか。
クラスでオリジナルの国語辞典を作るのもいいですね。以前、僕の本（『学校では教えてくれない！国語辞典の遊び方』）を読んでもくれた学校の先生が、クラスで作った国語辞典を送ってくれたことがあるんです。

言葉の意味や使い方に

正解はない



——出版社によってそれほど編集方針が違うなんて、比較によってこそわかることですね。

発行されたなかで、淘汰の結果生き残ってきた、とても優秀な辞書たちです。これらについては、新しい版が出たらず、冒頭の凡例が書かれているところから読み、改訂された内容をつかみます。
それから、どの辞書にどんな言葉が入ったのか、どんな言葉がなくなったのかを調べる。例えば、『三省堂国語辞典』は他の三つに比べて、新語の収録に積極的なんです。だから、ここに新たに収録されたものは、今の「生きた言葉」であり、他の三つに収録されるようになったものは、定着した言葉といえる。逆に、なくなったものは、今はもう使われることがなくなった言葉と考えられます。どちらかというと、『岩波国語辞典』は、長く使われてきた「定番」の言葉を収録することを仕事としている辞書ですね。何が載っていて、何が載っていないかは、各辞書の編集方針が表れる重要な情報なんです。

そうなんです。ただ、学習用に作られた国語辞典だと、収録している言葉にそれほど大きな違いは出ないので、方針の違いは見えにくいかもしれませんね。だから、中学生が国語辞典のおもしろみに触れる機会というのは、実はそれほど多くない。そう考えると、「中学生向け」ではない、一般の国語辞典を使ってみるほうが、中学生にとっては学ぶことが多いのではないのでしょうか。

それから、僕もそうだったのですが、学校によっては、全員が同じ辞書を使っていることもありますね。それもちよっともったいないなと思います。みんな同じ辞書を使っていたとしても、できれば教室内に別の辞書が何冊か用意されていればいいですね。違う国語辞典を持った人が五人も集まれば、「どの辞書で、どの言葉を、どう説明しているか」を比べるだけで、言葉をめぐる話が一時間以上もできるんですから。

——国語辞典にもいろいろあるんだ、と知るだけでも言葉への関心が高まるかもしれませんね。

一つの国語辞典しか知らないと、「辞書に書かれていることが唯一の正解だ」と思ってしまうんですよね。それは大人にも

がりそうです。

そうですね。日本語には「お手洗」「化粧室」「トイレ」「便所」「レストルーム」など、同じものを指す複数の言葉が存在するでしょう。辞書ではどれも同じように説明されているこれらの言葉を、適切に使い分けること。言葉を使いこなすには、そうした「運用の力」が必要であるといっている。そして、それを支えるのが、「伝えたこと」によって、選ぶ言葉が違ふんだ」という言語観だと、僕は考えています。

今、若者たちにとって身近なSNS上のディスコミュニケーションの多くは、相手が使った言葉の意味と、そこから自分が受け取った意味が食い違ふところから起きている。これは、知っている言葉の数が多いとか少ないとかの問題ではないですよね。言葉の真意を読み取ることができていない、ということなんだと思うんです。

——その背景には何があるのでしょうか。

▼『新明解国語辞典 第七版』（三省堂）の「公僕」の項目。



言えること。今は、テレビのクイズ番組などを見ていると、『広辞苑』に書かれていることが、なんだって正しいと考える風潮があるでしょう。でも、そもそも言葉には、正しい意味、正しい使い方というものはない。『広辞苑』だって、ある方針のもとで編集されたものなんです。

言葉って、生きているもので、正解がないからこそ、おもしろいんですよね。中学生の子どもたちには、ぜひそれを知ってもらいたいと思います。言葉の意味や使い方の正解を確かめるためではなく、言葉について自分で考えるきっかけとして、国語辞典を使ってもらいたいですね。

例えば、「公僕」という言葉があります。多くの国語辞典では、これを「公務員」とだけ説明しています。いっぽう、『新明解国語辞典 第七版』には、こんなふうに書かれている。「国民に奉仕する者としての公務員の称。（ただし実情は、理想とは程遠い）」（右ページ写真）。注目すべきは最後の一文です。これによって、「公僕」には皮肉めいたニュアンスがあつて、人に向かつて使うと、ばかにすることにもなるんだってということが、ちゃんとわかりますよね。

こうしたことを理解せずに、表面的な意味だけを見て言葉を使う。その言葉が使われた意図や文脈を考えずに表面的に受け止める。おそらく、そんなふうにしてディスコミュニケーションが発生しているのでしょう。実際のコミュニケーションの場で求められるのは、言葉をたくさん知っていることよりも、自分が知っている言葉のニュアンスをきちんと理解して使えること。

言葉って、生きているもの。
正解がないからこそ、おもしろい。



だから、言葉の数を増やすことばかりでなく、語感や運用にも注力した国語の授業が、これからの時代、ますます大切になってくるのではないのでしょうか。

——言葉の数については、運用に足る程度あればいいということでしょうか。

もちろん、最低限必要な言葉の数というのはあります。でも、色鉛筆にたとえるとして、64色とか100色とかは必要ない。20色もあれば、わりと多くのことが表現できます。「レモン色」がなければ黄色と白を、「紺色」がなければ青と黒を混ぜてみればいい。中学生にもなると10色ではさすがに足りないでしょうけど、20色ぐらいの中でうまくやりくりすることを知ってもらえたらと思います。

若者たちがそうやって言葉を使うようになると、とても興味深い現象を目にすることがあります。僕は大学一年生に教える機会があるのですが、彼らは最近、「つらい」を「つらみ」と言ったり、「うれしい」を「うれしみ」と言ったりして名詞化しているんです。教育的には眉をひそめる表現かもしれませんが、これこそ「生きた言葉」だといえます。

——これまでにない新しい使い方ですね。そもそも、「悲しい」という形容詞とは別に、「悲しむ」という動詞の名詞形「悲しみ」があった。おそらく「悲しみ」だって、使われ始めたときにはけしからんと言われていたかもしれないけれど、今は違和感なく受け入れられて、みんなが使っていますよね。だから、僕は、こういう現象を、新しい言葉が生まれるドラマチックな瞬間と捉えています。

規範を教えることはもちろん大事です。でも、規範から外れるものを否定し続けることは、言葉に正しい意味や使い方があると信じることに同じです。それは言語観の硬直にも結び付くでしょう。言葉って、もっと自由なものだと思うんです。言葉を学ぶ国語の授業では、新しい言葉が生まれる先端にみんなが立っているんだという意識のもと、言葉の自由さや表現のおもしろみに触れることが大事なんじゃないでしょうか。それはきっと、言葉を使いこなすことにもつながるはずです。

「生きた言葉」を体に入れて

——国語辞典を使って学習をしている中学生に向けて、メッセージをお願いします。

まずいちばん伝えたいのは、「言葉は生き物である」ということ。中学生って、「生きた言葉」の中で、生活に必要な言葉を身につけていく時期だと思います。言葉に正解はないことを知り、「生きた言葉」をしつかりと体に入れてもらいたいです。

それから、今持っている色鉛筆は10色ほどかもしれないけれど、これから絵を描いていくためには、20色ぐらいまでは増やしてほしいですね。ただ、「緑」は持つていてほしいけれど、それを超えて、「うぐいす色」や「ビリジアン」みたいな細かい緑の違いまではいらなないと思っています。

——先生方に伝えたいことはありますか。

「言葉は生き物である」という前提で、子どもたちに教えてもらえたらいいなと思います。そして、ぜひ、国語辞典を使って、言葉の意味を考えたり、説明を書いたりする授業を試してみてもらえたらうれしいです。僕は、国語辞典の魅力や楽しみ方をおみ砕いて皆さんにお伝えするのが仕事だと思っています。もし必要であれば、直接、授業をさせていただきますよ(笑)。

——きっと楽しい授業になりますね。今日は、ありがとうございました。

サンキュータツオ

の おすすめ国語辞典

用途によって使い分けられるよう、「辞書は二冊持て!」と、いつも主張しています。

中学生が一冊目に持つのにおすすめのものが、『学研 現代新国語辞典 改訂第六版』。もちろん、教科書に載っている言葉はしっかり押さえています。そのうえ、「類語と表現」という囲みが随所にあって、言い換え可能な類義語や関連語・表現を紹介してくれています。「雨」を調べれば「春雨」「時雨」などが出てくるので、微妙なニュアンスの違いを見つづけるのに便利です。

二冊目としては、『ベネッセ 表現読解国語辞典』。これは、言葉の運用に特化した辞書だと思っています。語釈は簡潔だけど、どんなときにどう使うかについてはとても丁寧に説明してくれているんです。例えば、「もつとびつたり」という囲み。考えや気持ちを表す言葉について、細かいニュアンスごとに類義表現を紹介していて、よりぴったりのものを探すことができます。「心配する」を言い換えるにも、何を心配しているかで、選ぶ言葉は違います。表現するときに特に便利な辞書です。

せっかくの機会なので、アプリ版『大辞林』もご紹介いたします。このアプリのすばらしいところは、五十音だけでなく、テーマごとにどんどん下位語に遡りながら言葉を探ることができること。紙の辞書をランダムに開くのと違う、自分の興味に沿った新しい言葉との出会いをもたらしてくれます。これは、紙にはできないことです。



学研 現代新国語辞典 改訂第六版

金田一春彦
金田一秀穂 編

学研
3,000 円 + 税



ベネッセ 表現読解国語辞典

沖森卓也
中村幸弘 編

ベネッセコーポレーション
2,800 円 + 税



iPhone・iPad
アプリケーション
大辞林
物書堂 / 2,600 円

国語辞典アプリのススメ

生きた場面の中で言葉に出会う

東京都港区立赤坂中学校教諭

甲斐利恵子^{か い り え こ}

1 指導の意図

「物事を考えることができる人」を育てたい。そんな思いをもって毎日の授業に臨んでいます。そして、子どもたちの思考力を伸ばすために、私が重視しているのが語彙力です。

語彙力は、思考力に大きく関わります。例えば、「いっぽう」という言葉の後は「比較」することが促されるでしょう。そんなふうには、言葉は「考えを連れてくる」ものだと、私は考えます。

ただ、言葉というのは、その背後にある場面と切り離して理解したところで、なかなか自分のものにはなりません。子どもたちには、ぜひ、実際の生活の中で「使える」言葉を身につけてもらいたいのです。そのためには、日常で使われている生の言葉^{なま}を素材とし、それが使われた場面とセット

2 日常的な実践

①「辞書は友達」

日常の生きた場面で使われる言葉を素材にするには、言葉のおもしろさに気づき、言葉に親しむ姿勢をもつ必要があります。そこで、入学後の授業開きから大切に位置づけているのが、辞書を引くことです。「辞書を引く」というと、「意味調べ」「お勉強」という印象をもつことが多いのが、入学当初の子どもたちです。私は、そんな彼らに、勉強のためではなく、生活の中で「あつ」と思ったときに辞書を引くことを習慣づけ

たいと思うのです。

■辞書が身近にある環境づくり

そのために心がけているのが、辞書が身近にある環境づくりです。普段、国語の授業を行う国語教室には、五種類の国語辞典『例解新国語辞典』『新明解国語辞典』『明鏡国語辞典』『ベネッセ新修国語辞典』『学研現代新国語辞典』を数冊ずつと、その他の国語辞典や類語辞典などを一、二冊ずつ置いています。そして、毎時間の授業が始まる前に、ここから好きな国語辞典を選び取り、席に着くことをルールにしています。

■「辞書早引き大会」

授業開きの時間、ノート指導などを終えたら、まず、「辞書は友達である」ということを押さえます。「辞書というのは、あなたたちのお友達で、いつでもそばにいて、支えてくれるもの。だから、『辞書はお友達』を合言葉にね」などと話をしながら、辞書

を身近な存在として意識づけていきます。

その後に行うのが、「辞書早引き大会」です。「早引き」といっても、早く引けるようになることを目指すわけではありません。主眼にあるのは、授業での辞書の使い方を確認することです。ちょっとしたゲーム性とともに、楽しい学習のスタートを切るために、子どもたちには、「辞書早引き大会しよう!」と投げかけることにしています。

手順は、次のとおりです。

- 1 教師が黒板に書いた言葉を、国語辞典で引く。
- 2 言葉を見つけたら、手を挙げる。
- 3 自分が引いた言葉・挙手した順番・語釈をノートのメモ欄にさつと書く。
- 4 三番目ぐらいまでに挙手した人が、順に、自分が使っている国語辞典名と語釈を発表していく。教師はそれを板書する。
- 5 他の人が引いた国語辞典の語釈は、必要に応じて自分のノートにメモする。

辞書を引くことは、できる子とそうでない子の差が生まれにくく、みんなが活躍で

きる時間となるため、教室は大いに盛り上がります。時には、同じ国語辞典を選んだ子の発表が続くこともあります。それでも、四、五番目ぐらいの子が発表するころには、違う国語辞典の語釈が出てきます。すると、子どもたちから「辞書によって、こんなにも説明のしかたが違うなんて!」という声が上がることがあります。これが、教室内にさまざまな辞書があることのよさです。「辞書って、人が作っているもの」「さまざまな語釈がありうる」という雰囲気の中で言葉に出会うからこそ、言葉のおもしろさにも気づくことができるのだと思います。

■言葉に出会ったら辞書を引く

次の時間からは、授業中に一、二回、辞書を引く場面を意識的に設定していきます。生徒に配布する「国語教育通信」(※)や私の話の中で、「これを引かせよう」という言葉を意識して使うようにするのです。例えば、話の中で「千里の道も一歩から」という表現を使ったら、「この言葉、わかるかなあ……」と、私はしばらく黙っています。すると、彼らは辞書を引いて、「辞書早引き大会」のときと同じように、手を挙げ、順に語釈を発表していく。初めは気づかずにいる子も、言葉に立ち止まること



▲国語教室の本棚には、さまざまな国語辞典や類語辞典などが用意されている。

国語の授業で、 ↑という詩はこれ で深い意味を ことか出来まし ミニスカートとい た。	培う
その社会に属する 人から見行爲の規範 とすべきもの。	☆鑑(かみ)
本培う	(もと、生育を促すたの に根元に土をかける 意)養い育てる。

▲生徒のノート。辞書で引いた言葉・挙手した順番(☆の中の数字)・語釈が書かれている。

を毎日続けているうちに、「わからない言葉に出会ったら、まず辞書を引く」という習慣が身についていくのです。

不思議なもので、私が「毎時間に一回以上は、必ず言葉に立ち止まる時間を作る」と強く意識していると、「時系列で書く」「主語と述語の呼応」など、引かせたい言葉が授業の中で自然に口をついて出てきます。大切なのは、その言葉のみを取り立てて提示するのではなく、「話の文脈の中、場面の中で、言葉に出会わせる」ということです。それによって、子どもたちは、背後にある場面や状況も含めて、その言葉を捉えていくことができるのです。

この実践を積み重ねるうちに、子どもたちは、他教科の時間にも「辞書がないと困る」と言うほどに、辞書に親しみをもつようになります。そして、自ら国語辞典を選ぶ視点もまた、育っていきます。辞書にはそれぞれに特徴があること、使用場面に合わせて選んで使うと効果的であることがわかってくるのです。入学当初は、中学生向けに編集された『例解新国語辞典』を使っていた子も、徐々に、『新明解国語辞典』『明鏡国語辞典』など、自分のスタイルに合ったものを手に取るようになっていきます。辞書を習慣的に使うことを通して、言語感

覚も磨かれていくのでしょう。

■子どもとの信頼関係も生まれる

この学習のよさは、言葉を見つけて手を挙げた子どもたちと「目が合う」瞬間をもてる、という点にもあります。何かを注意するときではなく、彼らが「できたー」と思ったときに目を合わせるができる。これは、とてもすてきなことです。うまくできたときに誰かが見てくれるというのは、心強いもの。ですから、彼らの気持ちを開いて、国語を学ぶための信頼関係を築くうえで、この学習の意義は大きいと感じています。

②「言葉の小劇場」

日常の生きた場面で出会った言葉は、実際の文脈の中、場面の中で、自分で使ってみることで、「使える」ものになります。ですから、新しい単元に入る前には、そこで扱う教材文からいくつかの言葉を取り上げ、それを使って百字程度の小さな文章を書く、という学習を行っています。子どもたちには、用紙を配布しておき、自主学習としても取り組ませるようにします。

例えば、「少年の日の思い出」（二年）であれば、「色あせる」「身にしみる」「むさぼる」「あいにく」「繕う」「を盾に」な

ど、子どもたちが普段使うことがなさそうな表現を十〜二十程度取り出しておきます。彼らは、ここから好きな言葉を二つ選んで、それぞれを使った文章を書くのです（左ページ例）。どれを選んでもかまいませんが、私はいつも、「二つのうち一つは、使ったことがない言葉に挑戦しなさい」と声をかけるようにしています。

辞書で調べても、言葉の使い方をつかみきれない子には、「例えばね」と言いつて、その言葉が出てくるような場面、つまり用例を私が伝えるようにしています。言葉が使えるようになるには、語釈だけでなく、用例も言えるようになる必要があります。考えるからです。これによって、子どもたちも、国語辞典に用例が載っている意味を理解するようになっていきます。

普段から、「場面」を意識している子どもたちは、この学習が大好きです。自分で場面を作るのも楽しいものですが、書いた文章を読み合うことで、友達の作った場面を味わい、自分では選ばなかった言葉の使い方を理解することができます。この学習のおかげで、その後の教材文の読みもより深く、確かなものになっていくように感じています。

3 生徒の反応・変化

こうした学習を通して、子どもたちの言葉に対する感度は研ぎ澄まされていきます。生活の中で、生徒が学んだばかりの言葉を使っていたりする場面を見るのは、教師としてうれしいものです。「国語教室の中でできる」ということを超えて、学んだことがそのもつと先に生きる。それが、私が目ざしていることです。

それには、普段の授業の机間指導も大切な機会となります。例えば、「書くこと」

この間、母が、自分が中学生だったときの話をしてくれた。そのときの思い出は、今でも色あせることがないという。受験が近づき、苦しむ母を支えたのは友達だった。私はこの日、母から友達の大切さを学んだ。

今日は、十六年ぶりにディズニールランドに行く予定である。二年ほど前からずっと今日を楽しみにしていた。だが、今日の天気はあいにくの雨。とてもがっかりして、言葉が出なかった。

僕の友達は、毎日毎日夜ふかしをしている。僕は、その友達と遊ぶことになった。その日も彼は眠たそうにしていた。僕は言った。「鳥にたとえるなら、夜ふかしの君は、さしずめふくろうだ。」と。

の時間で、手が止まっている子には、「こんな言葉がありますよ」と伝え、新しい言葉や表現を使うよう促し、全体での交流の場で、それを共有します。子どもたちが「あの言葉、かっこいい」と思うような仕掛けを作るのです。中学生は、「伸びたい」という気持ちが体中にあふれている時期。特に「かっこよさ」には敏感です。友達が使ったすてきな言葉を、自分でも使ってみたくなる。そんなふうに、彼らが「他者から学びたい」と思う場面を作るのも、教師の仕事だと思うのです。

二三年と、学年が上がるにつれて、授業後に子どもたちが書く学習記録が、ぐつと自己評価に富んだものになっていくことには、いつも驚かされます。具体的な物事を表す言葉ばかりでなく、抽象的な概念をめることができるようになっていくからなのかもしれません。まさに、言葉によって思考を得るということです。そのことを意識し、生涯にわたって考えることができる人を育てていけたらと、いつも思っています。（談）

「お前がやったことはわかってるんだ。」刑事はそう言った。だが、窃盗事件の犯人は、「ば、僕は自分の財布だと思ってたんです。」言葉もしどろもどろ、証拠もあるのに、まだ取り繕おうとするなんて、あきれたやつだ。

「キリキリキリ。」私のおなかが痛む。下っている痛みじゃない。今まで感じたことのない痛みが私を襲う。母に相談するが相手にされず、一人で悩みを抱え続ける。この後、救急車で搬送されることなど、私は知るよしもない。

公園に小さいチワワがいた。そこに生意気な子どもが来て、そのチワワをからかっていた。その後、チワワが急変。するどいきばをむき出しにして、その子めがけて追いかけていった。小さいからといって、あなどったからだ。

▲生徒が書いた「言葉の小劇場」の文章例

「なんかちよつと……」「そうきたか！」の循環

神戸親和女子大学教授 齋藤隆彦
さいとう たかひこ

1 指導の意図

「語彙の豊かさ」は、単に「語句の量が多い」ことは少し違います。「語彙」とは「言葉の集まり」のことです。例えば、色彩語彙。色名を多く知っているだけでなく、「やや赤みを帯びた明るい紫」を「オーキッド」、「暗い緑」を「橄欖色」などと、眼前のさまざまな色をピタリと表現できてこそ「色彩語彙が豊か」といえるのではないでしょうか。

石黒圭は、「語彙力Ⅱ語彙の量(豊富な語彙知識)×語彙の質(精度の高い語彙運用)」と論じています(※)。ピタリと表現できるよう「語彙を豊か」にするには、「語句の増量」を目ざして、既成の言葉を学ぶ必要があります。けれど、世界の事象は多様。有限の言葉の収集に加えて、「言葉の再活用能力」も、語彙指導の範囲に入りたいと、私は考えます。前述の色彩語「オーキッ

2 表現の可能性を意欲する

あるコト(モノ・感情など)をピタリと言い表すためには、ひとまず浮かんだ自分の言葉に「ピタリかな?」「なんかちよつと……(違つかない)と思うことが大事です。言葉の選択を意識し始めると、誰かの言葉が自分の選択肢を超えていることにも気づけ、「そうきたか!」と思えます。そんな「そうきたか!」によって表現の可能性の広がります。

りを知り、別の何かを表現するときも、「なんかちよつと……」と考え始める……。そんな循環が生まれれば、語彙が充実していくはず。ここでは、私の中学校現場での実践から、五つのアイデアを紹介します。

①「一言自己紹介」

入学直後の自己紹介から、「無難な選択」「選択を意識しない選択」ではなく、「なんかちよつと……」を引き出す活動を組みます。授業冒頭に毎回「一言自己紹介」の時間を設け、クラス全員に、自分の名前とその日のテーマに沿った自己紹介の内容(単語)を発表させました。テーマは、「出身小学校」などの負荷の低いものから始め、「好きな食べ物」などへと広げていきます。「好きな食べ物」では、「ラーメン」「寿司」などが挙がるなか、ある生徒が「湯葉」を挙げました。「無難な選択」ではない言葉に、「何それ?」と、教室内は盛り上がりました。

⑤プレゼンテーション演習

学年後半では、全員によるプレゼンテーション演習を行いました。テーマは、「好きなモノ・コト」「おすすめの物語」などです。ここまでの実践によって、「なんかちよつと……」と思索し、「そうきたか!」と選択の可能性の広がりを意識するようになっていれば、生徒たちは発表内容や方法の工夫を楽しみます。発表では、テーマに応じた内容を各自の「語彙」を用いて披露するようになります。例えば、文学について語る語彙としては、「RADWIMPSの世界観が好き」「くまのプーさんは、解釈によっては……」「あの作品のオマージュ」などの言葉が聞かれました。友達への発表が刺激になり、さらに言葉の選択が磨かれます。

3 おわりに

新学習指導要領では、学び手が自ら学び成長することがますます求められます。「語彙の充実」も、教師が語彙リストを与えるより、生徒が「なんかちよつと……」と思索し、「そうきたか!」と感嘆して共有を楽しむ、自身の語彙を充実させていく。そんな方向にいざなうべき、と思うのです。

この日、「湯葉」を知り、「おいしそう」と感じた生徒の「食べ物語彙」には、この言葉が加わったでしょうし、何より「選択のおもしろさ」を知る機会となりました。

②韻文の空欄埋めで試行錯誤

■「() をしても一人」
括弧内にピタリとくるものを考えさせます。生徒からは、「おにごっこ」「あやとり」や、「鍋」も挙がりました。その後、尾崎放哉の俳句を教え、「確かに寂しい」「心細そう」などと鑑賞しますが、「咳」が唯一の正解と教えるのが目的ではありません。ピタリとくる言葉をあれこれ考えること、「そうきたか!」と選択の幅を広げること、「鍋」「咳」などを「一人だと寂しいこと語彙」に加えることなど経験させたいのです。

■「街をゆき子供の傍を通る時」

() の香せり冬がまた来る」
こちらも同様に問います。生徒からは、「ストーブ」「灯油」「こたつ」、そして「たんす」という言葉まで出てきました。「初冬のセーターの匂い」とは「そうきたか!」です。もちろん、原典である木下利玄の短歌と同じ「蜜柑」も挙がりました。「初冬の子どもの匂い」について思索し、誰かの考えに「そうきたか!」と感嘆すること

「冬の匂いを表す語彙」が充実する。「季節の匂い」という新しい語彙も意識され始めます。

③「知ったかぶり」を共有

地元大学の先生方による中学生向けミニ講義を、生徒はそれぞれの講座に分かれて学びました。せっかくなので「知ったかぶり」で講義内容の説明を書き、読み合う活動を組みました。「古事記」「地方自治」「高分子」などについて、当然、専門用語を使うのですが、言い換えたりたとえたりもしつつ書いた文章を学級で共有しました。大人の語彙を背伸びして使うことで、自身の枠を拡大する感覚を経験できる学習です。

④「学ぶ価値ある四字熟語」を持ち寄る

授業冒頭の漢字学習での実践です。「みんなが学ぶ価値のある四字熟語を募集」と題しました。生徒全員が、好きな四字熟語を一つ選び、読み方・意味・使い方を調べて書いてくるのです。それを集めて作った「教材」を、みんなで覚えていきます。出てきた熟語は、「魑魅魍魎」「刻苦勉励」「融通無碍」「一意専心」「啾啄同時」などなど多様で、学習後、日記や作文を書くときに使う生徒の姿も見られました。

「ヤバイ、ビミョー」からの卒業

くもつと「伝わる」表現を目ざしてく

使用教材 .. 「言葉を集めよう」 (二年)

岐阜県各務原市立中央中学校教諭

村上薫子

① 指導の意図

生徒たちを見てみると、さまざまな状況や考えを一つの言葉だけで表現してしまうことが多いように感じます。例えば、生徒がよく使う言葉に「ヤバイ」「ビミョー」があります。彼らによれば、「ヤバイ」は本来の「危険だ」「悪い予感」等の意味の他に、「すごい」「すてきだ」などのプラス評価を表すものとして、「ビミョー」は肯定とも否定ともいえない曖昧なニュアンスを伝えるのに便利で、どちらかというところ定の意味合いで使うとのこと。

言葉は変化するといわれますが、ニュアンスで伝え合える若者どうしであつても、物事や自分の考えを単純なひと言で片づけてしまう傾向は、曖昧なままの思考を助長させ、よりよく伝えようとする相手への配慮や、自身の言葉遣いへのこだわりが欠落していく危惧を感じさせます。

2V 授業の展開

生徒たちの語句を増やし、語彙を豊かにするために、そのよさ——つまり、「表現するって楽しいな」「その表現、すごくわかりやすい」という実感をもたせることが大切だと考えました。そこで、『ヤバイ、ビミョー』からの卒業もつと『伝わる』表現を目ざして——と題し、普段の言葉の中に息づくオノマトペ（擬声語・擬態語）を取り上げ、五感を働かせて表現する楽しさを味わえる授業を試みました。

○伝えたいことや気持ちに合った表現をするために、オノマトペを効果的に使う。

■学習の実際・指導の工夫

・オノマトペについて理解し、学習の見通

濃厚でクリーミーなつあつの○○。
中にはプリプリのエビ。プチツという食
感が最高。じゅわじゅわおどる○○から
出るほんわかとした甘い香りもやみつき
になるおいしさ。(グラタン)

自分の紹介文がクイズとして成立するためにどんな表現を用いるべきか熟慮する生徒の姿が見られ、生徒が自分の表現を見つめる・見直すよい機会となりました。

第三時

・イラストを見て人物や場面の様子を伝えるオノマトペを考え、交流する。

ここでは、表現の対象を食べ物以外の物や音、動作、状態、感情に広がります。参考図書(※)に掲載されている吹き出しのなないイラスト(男の子が缶ジュースを飲んでいる場面)を使用し、どんなオノマトペで表現できるかを考えさせました。

プルトップを開けているイラストからその音を尋ねると、生徒からは「カチッ」「プシュッ」という声が上がりました。「プシュッ」と答えた生徒が「炭酸飲料をイメージした」と言うと、他の生徒は「ジュースの種類によつて音は違う」と発言しました。また、ジュースを飲んでいるイラストから

しをもつ。

・自分の好きな食べ物の特徴を表すオノマトペを用いておいしさが伝わる紹介文を書き、クイズ大会をする。

① オノマトペの豊かさに気づく

オノマトペを身近に感じられるよう、お菓子のパッケージを複数提示しました。

キャッチコピーには、インパクトを与える言葉、思わず食べてみたくなるような食感や見た目を伝える表現が豊富にあることに気づかせました。

② 五感を働かせて食べ物を表現する

お菓子以外の食べ物をいくつか提示し、五感を働かせたオノマトペを取り入れ、おいしさが伝わる紹介文を書かせました。「おいしい」という言葉を使わずにおいしさを表現することが条件です。生徒は、同じ食べ物でも多様なオノマトペが使えること、五感を働かせると「おいしい」の理由が具体的になることを実感していました。

は、「ごくくん」「ごくくり」がひと口で飲み下す様子であるのに対し、「ごくごく」「ぐびぐび」など反復型のものは勢いよく飲み続ける様子であると意見が飛び交いました。

3
V
おわりに

授業後、次のような感想が聞かれました。

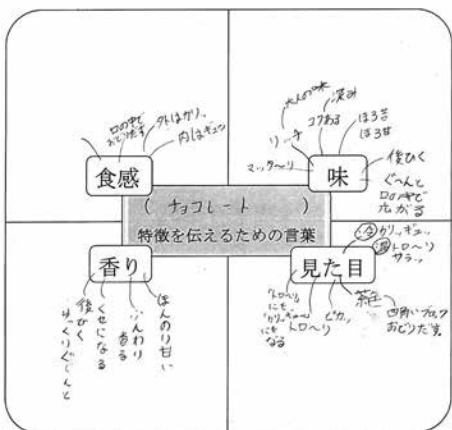
・オノマトペを使うと味や食感がもつと伝わる。「サクサク」と「ザクザク」は少

し言葉が違っただけで全く印象が違ふ。

・同じ絵でも人それぞれオノマトペが違い、こんな感じ方もあるのかと驚いた。

生徒たちは、オノマトペの表現の多様性やわずかな差異も敏感に感じていました。また、静止画であるイラストにオノマトペが命を吹き込むことも、活動を通して実感したようです。このことは、言語感覚を磨く大きなきつかけとなったと思います。

実践後、生徒の生活記録文にオノマトペを使った表現が増えました。今後は、オノマトペだけでなく多様な修飾語や比喻、類似表現なども視野に入れ、語彙を豊かにする授業を継続していきたいと考えています。



▲「チョコレート」のイメージマップ

③ 好きな食べ物クイズ大会をする

自分の好きな食べ物を友達に当ててもらうクイズ（紹介文）を作るため、その食べ物について「味、食感、見た目、香り」の観点でオノマトペのイメージマップを作ります。紹介文は、集めた言葉を効果的に使って百字程度に収めるようにしました。

〈紹介文の例〉

ほろ苦く甘い、深みのある大人の味。
口の中でぐくんと広がる甘みと苦みのほ
どよいバランス。冷やすと外はカリッ。
内はギュッ。温めるととろろりとおど
ります。ほんのり香る〇〇は食べたらず
やめられない。(チョコレート)



千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。千葉県の公立中学校教諭、千葉大学教育学部附属中学校教諭を経て、現職。共著書に『中学生を作文好きにする！新レシビ60&ワークシート』（明治図書出版）など。

人物の関係を「可視化」する

「読むこと」指導の一番の難しさは、それが目に見えない、頭の中の活動であるということ。デジタル教科書は、それを可視化する一つの手立てになりそうです。今回は、そんな「読むこと」指導の中での可視化について考えます。

1 「聞く」中心の学習から「見る」中心の学習へ

先日、筑波大学附属小学校の青山由紀先生の授業を参観しました。

青山先生は、デジタル教科書を活用した国語の授業を数多く実践している先生です。このときの授業でも、小学生が一人一台のタブレット端末を使って「読むこと」の学習に取り組む、最先端の国語の授業を見ることができました。

まず、先生が児童に発問をします。すると、児童は自分のタブレット端末で学習者用デジタル教科書の「黒板ツール」(※)を使って教材本文を抜き出したり、書き込んだりして思考をまとめていきます。

先生の手元にあるタブレットには、授

業支援システム(Active School)で送られた児童全員のデジタル教科書の画面が映し出されています(タイズ番組のように、全員の画面がリアルタイムに反映されて、先生の手元にその情報が集められます)。

また、教室前面に巨大な電子黒板があり、同じように児童全員の画面が映し出されています。青山先生は「この発想はいいな」と思う児童の画面を選び、それを電子黒板に一つずつ、次々と大きく投影していきます。他の児童はそれを時折見ながら、内容を参考にして活動を進めていきます。

クラス全体での共有の活動でも、この授業支援システムが大活躍します。ある児童の画面をクラス全体に提示し、それをもとにみんなで考えを深めていきます。

この最先端の授業が、従来の授業と何が違うのか。キーワードには「見ること」があるのではないかと気づきました。

児童は、発問に対する自分の考えをデジタル教科書に表示して「可視化」します。そしてそれを教師はリアルタイムで「見て」、把握していきます。教室前面の電子黒板には児童の画面が映し出されるので、それを他の児童は「見て」ヒントとすることが出来ます。全体での話し合いでは、一つの画面を全員で「見合い」、それを土台として共有することが出来ます。

「読むこと」の指導で私が難しいなと感じているのは、子どもの頭の中の「読む」という活動を、どうやって目に見える形で把握することができるかという問題です。それは、どう読ませるかという

問題と同じくらい、私が課題として考えていることです。

黒板も、ノートも、ICT機器も、また、話し合ったり書き合ったりする言語活動も、つまりは「読む」という見えない世界の、可視化(可聴化)と共有の問題と言え換えられるかもしれません。

2 授業の中の「可視化」を考える

国語の授業では、どんな「可視化」(可聴化)ができるでしょうか。

国語の授業での「可視化」

○可視化の例

- ・【教科書】の本文に書き込みをする。
- ・感想や考えを【ノート】【黒板】に書く。
- ・グループで話し合ったことを【模造紙】や【ホワイトボード】に書き出す。
- ・【ワークシート】に沿って、問題に対する自分の考えを書く。
- ・意見を【付箋】に書いて整理する。
- ・順序や関係などを【図表】に表す。
- ・イメージしたことを【イラスト】で描く。

○可聴化の例

- ・解釈を【音読】【動作】で表現する。
- ・考えたことを一人で【つぶやく】。
- ・教師の発問に【口頭で答える】。
- ・お互いに疑問点を【質問し合う】。
- ・隣の生徒やグループで【話し合う】。
- ・考えたこと、調べたことを【発表する】。

※「1」は可視化・可聴化を支援するツールや手法です。

このような、可視化・可聴化のさまざまな手立てを講じながら、「読む」という頭の中の目に見えない世界を表出させ、それを共有していくことが授業づくりの一つのポイントとなっていきます。

では、デジタル教科書は、どのようにして可視化を支援してくれるのでしょうか。

3 「可視化」を生かした授業実践

①教材

「盆土産」(三浦哲郎／二年)

②ねらい

・作品の構成や登場人物の描写に着目して、人柄や心情を読み取る。

③教材の特徴と授業づくりのポイント

「盆土産」は何度も授業で取り上げていますが、この作品はなかなか生徒にとってイメージしづらいところが多く、かなりしつかりと読み込まないと味わうことが難しい作品だと感じています。

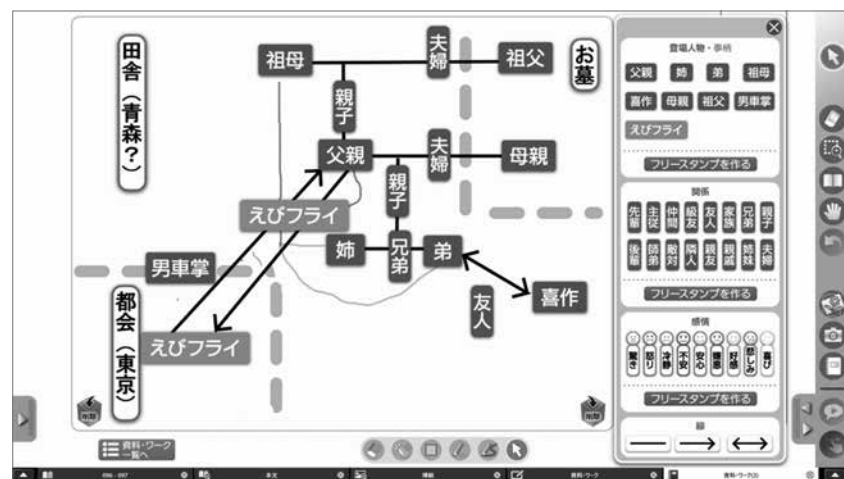
特にポイントとなるのは、家族の置かれている状況を理解すること、時代背景を理解すること。この二つが押さえられていないと、父親が「お盆」に帰ってくることの重みが伝わってきません。

そこで、授業では「ジグソー学習」の方法で、グループ内で分担して作品世界の中に入っていくようにしました。

ジグソー学習の分担

- ①「いつ・どこで」係……情景描写や会話文などから時代や場所を類推する。
- ②登場人物係……登場人物の関係や、人柄を読み取る。
- ③語句調べ係……難語句について辞書などで調べる。
- ④キーワード、キーワード係……作品中の言葉(「エビフライ」「帽子」「ドライアイス」など)について、読み取れることを考える。

※ 教材本文から抜き出したキーワードや挿絵を、自由に動かすことができるツール。詳細は、本連載第2回(本誌82号)参照。



▶デジタル教科書を使って登場人物を整理した画面

④ 授業の流れ

▼第一時

通読し、気になったところに線を引いたり、感想や疑問をノートに書いたりしました。書き込みやノートをもとにグループで意見交換をしました。

▼第二時

グループ内で係を決め、各自で追究活動をしていきます。国語辞典や図書館の資料を使って調べた生徒もいます。

授業の後半で、他の班の同じ係の生徒どうしで集まり、それぞれの考えをデジタル教科書に書き込むなどして集約していきます(学習者用デジタル教科書を各係に一台貸し出し)。

▼第三時

それぞれの係で調べたり読み取ったりした内容をグループ内で伝え合い、さらにクラス全体で共有しました。ここで学習者用デジタル教科書の画面を示しながら確認しました。

▼第四時

第一時で出た問いについて、まだ解決していないもの、新たに出的問いについて考え、作品の読みを深めました。

⑤ 登場人物の関係を可視化するツール

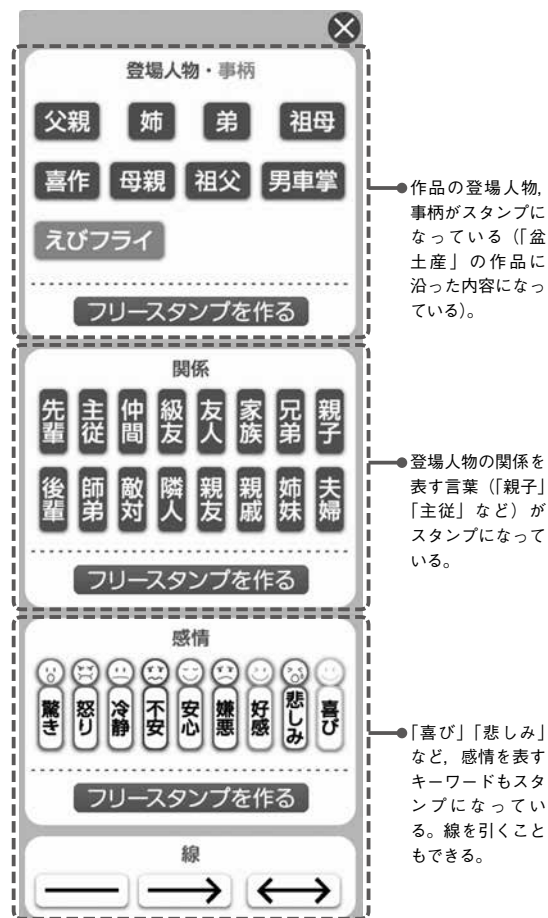
第二・三時に活用したのが、デジタル教科書に「ワーク」として収録されている登場人物の関係を整理するツールです。

このツールには、左のようなスタンプが用意され、それらを配置することで人物の関係が整理できるようになっています。

もちろん、紙のノート上でも人物の関係を整理することはできますが、デジタルのよさは、スタンプや線などを自由に動かして、試行錯誤しながら自分のイメージに合ったものを作り上げることが

4 授業でどう活用する？

今回の授業では、登場人物について読み取る係の生徒が、情報を共有する際にこのツールを活用しました(左ページ図)。それ以外にも次のような場面で活用できそうです。



● 作品の登場人物、事柄がスタンプになっている(「盆土産」の作品に沿った内容になっている)。

● 登場人物の関係を表す言葉(「親子」「主従」など)がスタンプになっている。

● 「喜び」「悲しみ」など、感情を表すキーワードもスタンプになっている。線を引くこともできる。

① クラス、グループで共有する

指導者用デジタル教科書とプロジェクトなどの投影装置がある場合には、生徒一人一人がノートなどに整理した人物関係図を、教師が全体で集約するときに使えます。

② 個人(グループ)で整理する

一人一台(グループで一台)の学習者用デジタル教科書がある場合は、最初からこのツールを使って登場人物を整理していくことができます。

5 「可視化」を引き出すデジタル教科書へ

このように、文学作品に表れている「人物の関係」や「性格」という「目に見えないもの」をデジタル教科書というツールによって「可視化」し、共有したり、深めたりしていくことができました。

「盆土産」の実践では、登場人物を可視化したことによって「書かれていない部分」にまで目が向き、気づきが生まれました。家族の中での「母」の不在に気づいたのです。言うまでもなく、これは作品を理解するキモの部分です。四月教材の「アイスプラネット」の学習では「書

かれている部分」から人物の関係を読み取りましたが、この学習では、それを一段深めることができたと思います。

また、このツールを生徒が使いこなしていってほしいなと感じたことがあります。それは、「フリースタンプ」の活用です。フリースタンプは、自由に文字を入れてスタンプを作る機能です。生徒は登場人物の性格など、オリジナルのスタンプをどんどん作り出していました。こういうカスタマイズは、生徒はとても楽しんで取り組みます。

「ツールに使われる」のではなく、自分たちで「ツールを使いこなす」、または「フリースタンプ」のように「ツールを作る」レベルまでいくと、デジタル教科書などのツールは、真に自分たちの学びの道具となっていくます。そのためにも、ある程度、自由度のある活動の中で、生徒に試行錯誤させて思考を引き出していくことが大切だと感じます。

絵本ともしっかりと親しく なるための読み聞かせ

授業づくりに役立つ本、授業とからめて生徒に読ませたい本などを紹介するリレー連載です。第一回は、高橋伸先生（札幌市立向陵中学校教諭）にご担当いただきました。



北海道札幌市立向陵中学校教諭
高橋 伸
1964年、北海道生まれ。北海道教育大学札幌校卒業。北海道教育大学附属札幌中学校を経て、札幌市の公立中学校教諭として勤務。

【ねらい】

- ・目的や相手を意識した読み聞かせを工夫する。
- ・絵本や読み聞かせのおもしろさに気づく。

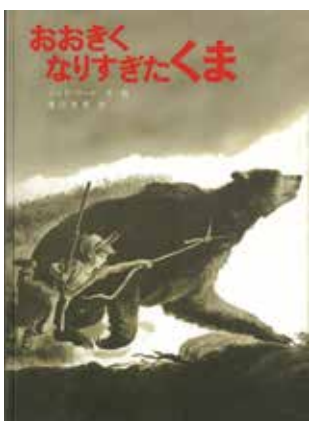
技術・家庭科の授業で絵本を読む声が聞こえてくる。教室をのぞくと、生徒が真剣に、幼児向けの絵本を手に読み聞かせの練習をしている。そんな光景が当たり前になってもうずいぶん経つ。家庭分野には「幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かわり方を工夫できること。」という指導事項があり、幼稚園や保育所に出向いたり、学校に園児を招いたりすることが多くなった。園児に読み聞かせをした体験が、絵本に目覚めるきっかけとなる生徒もいる。

小学校では教師による読み聞かせが盛んだが、中学校の国語ではほとんど行われないのが現状であろう。私も「読み聞かせは（中学生が興味・関心をもたないだろうから）やっても無駄」と考えていた。しかし、生徒たちは読む側・聞く側のどちらにも非常に熱心に取り組む。読み聞かせが授業として成立する鍵は、読むだけ、聞くだけで終わらないことだと思う。

例えば『ミリーのすてきなぼうし』では、「読み終えてから園児にクイズを出す」という課題で、Q&Aを作成した。幼稚園訪問の直前だったこともあり、相手意識をもって取り組むことができた。また、『おこだでませんように』では、主人公の少年が短冊に願い事を書く場面で読み聞かせを止めて、それぞれが願い事を予想して書いてみるのも楽しい。これらは、生徒たちが読み聞かせをしたいと感じる二冊である。

『おおきくなりすぎたくま』『リンドバーク 空飛ぶネズミの大冒険』は、構成や展開を味わう絵本である。絵本は短時間で読めるので、構成や展開について、その良さを発見したり、いくつかの作品を比較したりすることが可能である。

学級に置いてある絵本の中で、生徒のお気に入りには『世界で一番の贈りもの』（評論社）である。教科書（二年）で一度読んだ作品が、絵本だったことの驚きと、たくさん絵と共に味わえる喜びがあるのだろう。授業で絵本に接することができるのは、中学校が最後かもしれない。自らも楽しみながら、我が子に読み聞かせをする大人を育てたいと思う。



おおきくなりすぎたくま

リンド・ワード文・画／渡辺茂男 訳
ほるぷ出版／1985年

クマとの出会い、そして蜜月。それに続く悲しい結末を誰もが予想するが、ありきたりに終わらない展開が見事。どんでん返しをくう爽快感を味わいながら、構成や展開について考えることができる。



リンドバーク 空飛ぶネズミの大冒険

トーベン・クールマン 作／金原瑞人 訳
ブロンズ新社／2015年

スピード感とスリルある展開の本。主人公が苦労を重ねて夢を達成する姿は、映画を一本観たような満足感がある。この後に出版された『アームストロング 宙飛ぶネズミの大冒険』（ブロンズ新社）と合わせて読みたい。凝った装丁にも注目してほしい。



ミリーのすてきなぼうし

きたむらさとし 作
BL出版／2009年

小学校国語教科書（2年上巻）で教材として取り上げられている絵本。絵を指さしながら読んでいくと楽しい。幼稚園での読み聞かせでは、園児との会話が弾む。「自分だけのぼうしって何だろう」と、想像が膨らんでいく。



おこだでませんように

くすのきしげのり 作／石井聖岳 絵
小学館／2008年

特に男の子が共感する絵本。また、教師や親が、日常の子どもとの関わりを振り返って身につまされる一冊。関西弁の発音が難しいけれど、わからないなりに一生懸命読む姿を見せたい。